

五木寛之
エッセイ全集

わが心の
スペイン

五木寛之エッセイ全集・第九卷



わが心のスペイン

講談社

昭和五十五年一月十八日 第一刷発行

定価 九八〇円



五木寛之エッセイ全集（第九巻）
わが心のスペイン

著者——五木寛之

発行者——野間省一

装幀者——岡村元夫

写真——木村恵一（函）川西普巳（口絵）

印刷所——図書印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

製函所——文京紙器株式会社

用紙——本州製紙株式会社／ダイニツク株式会社

発行所——株式会社 講談社

〒一〇二東京都文京区音羽二ノ十二ノ二十一
電話〇三（九四五）一一一／振替・東京八一三九三〇

五木寛之エッセイ全集・第九巻——わが心のスペイン・目次

わが心のスペイン

三人のパブロ

わがカタルーニア

オーウェルと私

三人のパブロ

〈鳥の歌〉と芸術家たち

『戒厳令の夜』を終えて

〈戒厳令〉と〈戒厳令の夜〉

サンチャゴの秋

戒嚴令下の青春

暗い嵐の前夜

ヒットラーの怖れたもの

戦争の残したもの

暗い嵐の前夜

われらの歴史

現代の「反語的精神」——林達夫

現代青春のなかの頹廃たいはい

自殺する老人たち

ナシヨナリズムの諸問題

非孤独願望が意味するもの

266 262 256 239 232 228 219 216 207 198

負の地点からの発想

ヤキモノの世界の政治性

反時代とは……

解説／駒尺喜美

わが心のスぺイン

第一部

わが心のスペイン

スペイン戦争 一九三六年七月より三九年三月までスペイン国内で戦われたファシズム勢力と人民戦線・左翼勢力との武力抗争。ドイツ、イタリアが大量の軍事を投入してファシズム側を援助し、ソヴェトが人民戦線側を援助したので実際上は国際的な戦争とみなされる。三六年二月スペインの総選挙で人民戦線派が勝利し自由主義的な中間層・農民・労働者の統一に基くアサーニャ内閣が成立した。これに対してフランコ將軍ら軍部首脳は資本家・地主勢力と政府打倒計画を準備した。三六年七月一八日スペイン領モロッコでファシスト將校が決起、これをのろしにスペイン本土各地に軍隊の反乱が起った。これに対して労働者は武装し、政府側も武力抗争の方針を決定した。まもなく本土の反乱は鎮圧されたが、この反乱軍側の計画が失敗すると、ドイツ、イタリアは大量の武器、物資をフランコ側に供給した。活路を得たフランコ軍は九月末、本土の殆どを占領して首都マドリッドを半ば包囲するにいたった。内乱突発に際してフランスの人民戦線政府はイギリスの圧力のもとにスペイン両派のいずれをも援助せず武器を輸出しないという不干渉の提議をした。これに対してソヴェトは一〇月人民戦線側への武器援助を開始、また人民戦線の苦闘に感激と同情を寄せて世界各国から数千の知識人や労働者が国際義勇兵として戦闘に参加した。しかし優勢な武力に押されて人民戦線側は敗色を濃くした。政府は三六年十一月バレンシアに、三七年一〇月バルセロナに移った。その後も政府は武器購入のために奔走したがイギリス、フランスの不干渉政策はやまず戦局は明らかとなった。三九年一月バルセロナ陥落、三月マドリッドでも反共クーデタが起きてフランコ軍に降伏した。三月二八日スペイン人民戦線は最終的に敗北して、フランコ体制がスペインを支配することとなった。この内乱は世界的にみれば第二次世界大戦の一前段階であり、これを契機に全世界の進歩的知識人・労働者が反ファシズムに結集して国際的な統一戦線をしいたことは注目し値する。

（平凡社版『世界大百科事典12』より）

1 スペイン戦争との出会い

未来学というのが流行^{はや}っているそうだ。学会などでもでき、新しい分野の学問として注目を集めているらしい。私も興味が無いではない。だが、私の中では未^{いま}だに過去にこだわる気持ちが根強く残っている。だいたい私自身、様々なことにこだわる性格であるらしい。過去といっても、それは歴史と呼ぶには余りに身近かな時代と事件であって、とうてい冷静な視点で客観的に眺^{なが}めることのできない過去である。いわば現在と過去の境目のあたりと言える地点かもしれない。私にとって、スペイン戦争とは、そんな場所にある微妙な過去だと言えるだろう。

一九六九年、それはスペイン戦争が幕を閉じて、ちょうど三十年たった現在である。その三十年前に世界に何が起こり、何が終ったかに、私は必要以上の興味を抱^{いだ}き続けてきた。歴史と呼ぶには新しすぎ、現在と呼ぶには余りにも離れすぎている時代、そこにスペイン戦争がある。

今から三十年前の世界と、現在とを、重ね合わせて下から照明を当ててみる。ぴたりと重なる部分があり、はみ出した部分がある。だが、その二枚の陰画に、ひとつの共通した現実のありようを発見して驚くのは、私だけだろうか。

ベトナムという画像に重ねてみるスペイン。スペインをすかして見るチェコスロヴァキア。そのダブル・イメージのかたに浮び上ってくる薄暗く奥深い世界の顔は、くつきりと異様な遠近法に照らされている。この三十年間私たちは無数の戦争を見てきた。だが、その戦争のすべて、動乱のすべては、どこかにスペイン戦争の影をひいているような気がする。私がベトナムとチェコ、沖縄と三十八度線、中近東とアフリカが問題にされている現在、あくまでスペイン戦争にこだわるのは、いささか現実逃避的な姿勢と考えられなくもない。だが、私は余りにも過去にこだわらぬ現在の傾向にこだわっているのだ。先日、ある雑誌から電話で問いあわせがあった。それは驚くべき質問だった。ベトナム戦後の次の発火点はどこか？という特集を組むというのである。

「次はどこでしょう。中近東でしょうか。それとも朝鮮半島でしょうか」

ベトナム戦争は、いつ終ったのだろうか？ 私は慌てて新聞をひっくり返してみた。だが、北爆一時停止のニュースはあったが、終戦の見出しは遂に発見できなかった。私が三十年前の過去に

こだわる決心を再び固めるのは、こういった傾向のためでもある。私の考えでは、スペイン戦争は、まだ終ってはいない。戦火は一九三九年の春、フランコ軍のマドリッド占拠で消えたが、それは形の上だけの終戦である。また、ベトナムの実際の戦いは、ほとんどこれからであると言っている。朝鮮戦争も、いぜんとして本当は続いていると私は思う。

百年前の明治維新に関心を持つ人びともいるだろう。五十年前のシベリア出兵と米騒動を身近かに感ずる人もいるかもしれない。だが私が三十年前のスペイン戦争にこだわるのは、そこに自身の心を強く惹きつける何かがあるからだ。私にとってのスペイン戦争は、常に日本が二つの陣営に分れて内戦を戦う不幸な幻想と共にある。北日本と南日本の、正規軍とゲリラ部隊が、外国の軍隊に支援されて殺しあう状況を、私はしばしば思い描く。その実感に支えられてこそそのスペイン戦争なのである。ヘミングウェイや、G・オーウェルや、ポール・ニザンや、マルローや、シモーヌ・ヴェーユや、エレンブルグや、ピカソや、その他無数の作家や知識人の希望と挫折を文学的に追求しようというのでもなければ、学問的考証を意図しているわけでもなく、それはひとつの現実的な怖れ、私的なおののきの結果であると言ってもいいだろう。

ナシヨナリズムとインターナシヨナリズム、アナーキズムとマルキシズム、そして人間の理想と愚劣さ、献身と殺人、そういった、さまざまな問題の原型をそこに見、そこに確かめ、日本内

戦の不吉な影を白日の下にさらしたいという衝動が私をとらえてはなさない。スペイン戦争とは
いわば私自身にとっては、いまたしかに直面している一つの現実にはかならないのだ。

*

ところで一九三九年とはどういう年であつたか。ためしに昭和十四年の北国新聞をアトランダムにめくつてみると、こういった断片的な記事が目飛び込んでくる。

▽流行歌『春の国境』キングレコード・新星岡晴夫・先ずお聴きください！（広告）

▽独軍チェッコに進駐。遂に保護国とす。全領土を武力占領宣言（三月十六日）

▽ソ連機四十二機撃墜。二十八日午前、わが空軍は満州国領内ノモンハン附近に不法越境してきた
れる敵飛行機四十二機を撃墜した。（五月三十日）

▽独ソ不可侵条約正式調印。スターリンも立会う。全世界の関心を集中した独ソ不可侵条約の正
式調印は二十三日夜、クレムリン宮において行なわれた。（八月二十五日）

▽英仏断乎宣戦布告。全欧州大動乱に突入。イギリスは三日午前十一時十五分、対独宣戦を布告
した。仏国も同一歩調（九月四日）

▽流行歌新譜『名月赤城山』東海林太郎唄。『大利根月夜』田端義夫唄。ポリドール（広告）

▽昨日蓋を開けた万国博。ヤンキー振袖娘に歓呼。（十一月十六日）

こういった時代に、スペインではバルセロナが落ち、最後にマドリッドがフランコ軍の制圧下に入って、スペイン戦争の終結が宣言された。しかし本当のスペイン戦争は、ここから始まったと、私は考える。だが、私の前にスペイン戦争が立ち現われたのは、つい最近のことだった。私は三年前の夏、はじめて自分の問題としてスペイン戦争に出会ったのだった。

*

その年のはじめ、私は奇妙な計画を立てていた。そのことについては、前にどこかの雑誌に書いたことがある。つまり、私は意識的に時代とずれることを考えたのだった。私は当時、金沢に住んでいた。そして北陸の地方都市に引っこんで暮すからには、それなりの生き方があるように思われた。私の周囲を日々の事件が、目まぐるしく通過して行く。今日語られたことが、明日は忘れ去られ、色褪（いふ）せてしまう。テレビが、新聞が、雑誌がそうだった。私はそんな時の動きに逆（さか）らって生きたいと考えた。

そこで私は、毎月新刊の雑誌を読むように古い三十年前の雑誌を読もうと決め、「改造」と「中央公論」と「文学評論」のバックナンバーを手もとに集めた。それを毎月拾い読みするのは、楽しい仕事だった。その年、私の手もとにあったのは、一九三六年の雑誌だった。作家では広津和郎、佐藤春夫、堀辰雄、高見順、丹羽文雄、村山知義、などという人びとが作品を発表している。私はその古雑誌で「風立ちぬ」や「猫と庄造と二人の女」を読み、近藤日出造や、清水崑や、横山隆一その他の漫画家の漫画を見た。その中の小さなコラムに、例えばこういう調子のも
のがあり、なぜか私の記憶に残った。

「社員採用試験の絵にそえて、労務係長曰くへ人民戦線とは何か知ってる者は手をあげて、よろしい。君ら全部お断わりだ」

それらの古雑誌の中で、私をひきつけたのは、「改造」の秋季特大号だった。へ特集・スペインの内乱、という文字が表紙に刷りこんである号だ。グラビアの第一ページは、ズボン吊りをした中年男や、鳥打帽の労働者たちが列を作って歩いている写真である。その上には次のような文字がやき込んであった。